

令和6年度第1回
総合教育会議 会議録

開催日 令和6年5月28日

南 あ わ じ 市 教 育 委 員 会
南あわじ市・洲本市小中学校組合教育委員会

令和6年度第1回南あわじ市総合教育会議 会議録

1. 日 時 令和6年5月28日(火)

午前10時00分 開会

午後 0時24分 閉会

2. 開催場所 南あわじ市役所 第2別館 第5会議室

3. 協議事項

「学ぶ楽しさ日本一」をめざして

—授業改革・校務改革・教育施設環境整備の観点から—

4. 出席又は欠席した構成員氏名

出席構成員

〈南あわじ市〉

市長	守本 憲 弘	教育長	新 宅 忠 敏
教育長職務代理者	近 藤 宰 常	教育委員	青 木 京
教育委員	清 水 真 澄	教育委員	山 本 真 也

〈学校組合〉

管理者	守本 憲 弘 (兼務)	教育長	新 宅 忠 敏 (兼務)
教育長職務代理者	狩 野 時 夫	教育委員	近 藤 宰 常 (兼務)
教育委員	山 本 真 也 (兼務)	教育委員	橋 本 直 之

欠席構成員

なし

5. 事務局関係職員氏名

総務企画部付部長 家 田 和 幸

総務企画部副部長兼ふるさと創生課長 中 嶋 宏 昭

市民福祉部子育てゆめるん課長 稲 本 順 也

教育次長 福 田 龍 八 教育次長補兼学校教育課長 上 原 泉

教育総務課長 田 村 智 巨 社会教育課長 眞 野 匡 史

社会教育課付課長兼生涯活躍推進室長 阿萬野 真 司

市立図書館長兼滝川記念美術館玉青館長 山 家 光 泰

スポーツ青少年課長 柏 木 映理子 学校給食センター所長 山 形 さゆり

教育総務課係長 佐々木 友美 教育総務課主査 興 津 里 香

1 開 会 午前10時00分

【田村教育総務課長】 定刻になりましたので、ただいまより、令和6年度第1回南あわじ市総合教育会議を開催いたします。

本日の資料は、事前に皆様方へ、次第、出席者名簿、参考資料をお配りさせていただいております。なお、参考資料につきましてはファイリングさせていただいております。保存版として、今後も活用いただければと思いますのでよろしくお願いいたします。

まず、本日の出席者のご紹介をさせていただきます。

配付しております名簿の順にお名前をお呼びしますので、誠に恐れ入りますが、その場でお立ちいただきますようお願いいたします。それではご紹介させていただきます。

(田村教育総務課長より、出席者の紹介)

【田村教育総務課長】 本日の会議を傍聴される方は、南あわじ市総合教育会議傍聴要領に準じて傍聴されますようお願いいたします。

2 市長あいさつ

【田村教育総務課長】 開会にあたりまして主催者であります、守本市長よりご挨拶申し上げます。

【守本市長】 本日は公私お忙しい中、令和6年度第1回南あわじ市総合教育会議にお集まりいただきありがとうございます。今年度第1回の会議ということですし、メンバーが新宅教育長はじめ教育委員の皆様にも異動がございまして、新たなスタートを切るという気持ちで始めさせていただきたいと思います。

これまで浅井前教育長が就任されてからは、「学ぶ楽しさ日本一」の目標を掲げて様々な仕組みづくりを進めてまいりました。読書活動推進、防災教育、コアカリキュラム、アフタースクールなど、学ぶ楽しさを推進するための下地づくりに取り組んでまいりました。この度、新宅教育長が就任され、今後はこれまでの仕組みのもとで、先生の質の向上や保育と学校との接続など、基本的には先生方や保育士の方々といった人の資質によるものが大きいということで、ここに焦点を当てて取り組んでいくことになるという理解をしております。一方で、8年前に私が市長に就任した時の市内の出生数は350人ほどでしたが、昨年度は200人を切りました。これからも少子化が進む中、学校や保育所等がどういう体制をとるべきかが大きな課題となっており、

本格的な検討のスタートを切る時期に来ていると考えております。

本日は、これらについての全体像を事務局からご説明し、ご意見ご提案をいただければと思っております。今後の大きな流れを作っていく会議ですので、活発なご意見をよろしくお願いいたします。

3 議 事

【田村教育総務課長】 本日の協議事項に入ります。

協議事項につきましては事務局からご説明申し上げますので、進行につきましては守本市長、よろしくお願いいたします。

【守本市長】 それでは次第に従いまして協議事項に移ります。

「学ぶ楽しさ日本一」の実現をめざして

◇授業改革・校務改革の観点から

【守本市長】 本日の協議事項は、『「学ぶ楽しさ日本一」の実現をめざして』ですが、まずはじめに、授業改革・校務改革の観点から、事務局より説明をお願いします。

【上原次長補】 まずは、学校教育課から授業改革・校務改革について説明させていただきます。

第3期南あわじ市教育振興基本計画のテーマ、「学ぶ楽しさ日本一」実現に向けた市の教育施策として、ふるさと創造学習、スクールチャレンジ、防災教育等といった取組を進め児童生徒の資質能力の育成を図ってきました。去年は、特に授業改善をめざし、市教委学校訪問の際、各校で「授業プランシート」の作成を依頼し、授業内における児童生徒の資質向上や管理職からのスクールチャレンジを基にした評価と授業改善を促してきました。

しかし、これまで十分な改善につながらなかったのは、大きく3つの課題が考えられます。1つ目は、「学ぶ楽しさ日本一」について教職員が理解できているかを測れていない。2つ目は、学校の発信力が弱く、目標設定と効果や成果について保護者に共有されていない。3つ目は、一斉授業型がまだ多く、児童生徒が主体的に活動する授業形態が定着していない。ということです。

次に、校務改革として、「働きがいのある職場と児童生徒に向き合うゆとり」について説明します。教育委員会では学校の体制構築や仕組みづくりで働き方改革の取組を

促しております。勤務時間適正化委員会のもとにICT推進委員会、フォルダー委員会、各職種の部会があり、各校の標準化を進めながらボトムアップで業務改善に取り組んできました。特に「学校・教師が担う業務に係る3分類」に係る取組の推進として、教師以外の人材の確保をし、教師の負担軽減を図ってきました。具体的には、部活動指導員、スクール・サポート・スタッフ、特別支援教育支援員、学校司書、ICT支援員等さまざまな人材に入っていると考えております。しかし、次々と新しい校務支援PCやタブレットを活用した授業環境が現場に導入され、使いこなすための技術と意識の差が生まれています。また、生徒数の減は教師減となり、これまでの通りには学校運営ができなくなっているうえに、臨時教員や講師が見つからなく正規職員の負担や責任が増大しています。そこで、令和6年度は「授業改善と徹底した校務改革」を必ず一つのパッケージとして行います。例えば、各校では行事等の後ブラッシュアップを行うDCAPサイクル教育課程（直後プラン）を実施し、教育委員会では校務パソコンのデスクトップに先進的な取組例を定期的に掲示する等、変革をバックアップする仕組みを構築します。

それでは資料1「学ぶ楽しさ日本一について」をご覧ください。

まず、授業改善編では、今年の評価内容と評価時期について示しています。すべての教室で子ども主体に進められる授業の実現をめざし取り組みます。特に、今年度は、スクールチャレンジ事業を活用した公開授業を参観できる仕組みづくりと、校長の理念についてのプレゼンを実施して、良い取り組みを横展開し、共有できる仕組みを作ります。校長プレゼンで児童に「つきたい力」と「学び方」の説明を求め、授業改善を図ります。最終的に子ども自身が「つきたい力」と「学び方」が説明できるようになることをめざします。事業改善を核として次に、「学ぶ楽しさ日本一」について理解できているか、今年度はアンケート調査を行い実態調査を図ります。これをもとに「学ぶ楽しさ」について、学校の発信力を強め、目標設定と効果や成果について保護者や地域にも共有していきます。

2つ目は、既存の研修の整理と新しい研修と研修体制づくりです。今後の取組について具体的な研修の変更を示します。

そして、働きがいのある職場と児童生徒に向き合うゆとりを持つためにも校務改革は不可欠です。各校で進める改革例を共有する仕組みづくりを構築し、市の事業の効果検証と整理を行います。また、教育委員会における学校の働き方改革を推進します。特に、学校徴収金の公会計化、学ぶ楽しさ支援センター不登校支援事業としてアウトリーチ支援や心の健康観察等、教育DXの推進を行ってまいります。

以上でご説明とさせていただきます。

【守本市長】 説明が終わりました。授業改革に力を入れていくには校長先生のリーダーシップを最大限に活かしていく必要があるということだと思います。また、校務改

革では、現在市でもDXを進めていますがなかなか使いづらいしくみであると感じつつ、教育DXも対応していかなければならないところではあります。

前回の総合教育会議では、教育委員の方から阿万小学校の授業の取組について様々なご意見をいただきました。新宅教育長は阿万小学校でまさに授業改革にも携わっておられましたので、そこに焦点を当てつつ、いろいろご意見いただければと思います。

それでは、順に委員の皆様のご意見をおうかがいしたいと思います。

【山本委員】 授業改革についてですが、私はコミュニケーション力を伸ばしてほしいという思いを持っております。コミュニケーション力は社会人になっても一番大切な能力だと思いますので、そこを大切に授業を行っていただきたいと思います。保護者の発言力が強いと、子どものコミュニケーション力も変わってくると思います。大勢の中で自分の意思を発言できる人になってほしい、それが今後の子どもたちの将来の大きな力になっていくと思っています。私は自分の子どもたちには社会体育に参加させており、いろいろな人と関わる中で自分の意見を言えるようになる子になってほしいと思っています。

資料の中に「学校の発言力が弱い」という課題が出ておりました。私はコロナ前とコロナ中にPTAの役員をさせていただきました。コロナ前の役員の際は学校行事や授業参観に参加させていただく中で、先生方や保護者の方と関わらせていただく機会が多く行事も盛大に開催されていきました。コロナ中の役員の際は、学校に人が集まらない状態で、教育という形が変わって来て保護者同士や学校とのかかわりが少なくなったと感じました。それによって学校からの発信力も落ちてきたのではないかと思います。ですが、徐々にコロナ前の状態に戻ってほしいという思いを持っておりますし、先生方の気持ちも戻っていただきたいですし、学校の行事も前のように活発になればと願っています。

「学校の勤務時間の適正化」については、タブレット導入により授業の形態も変わってきています。保護者からすると、学校の先生は子どもを預かってくださっている方たちです。勤務時間適正化でいろいろ変わってくるかと思いますが、子どもたちを守ってくださる立場であるということは忘れないでいただきたいと思います。システムの導入などにより学校生活が変わっていく中でも、先生と子どもたちの形は保ったまま、進んでいただきたいと思っています。中途半端な関係になると、学校と保護者との亀裂にもつながりかねないと思いますので、その辺りも考えつつ改革に取り組んでいただければと思います。

【橋本委員】 授業改革と働き方改革をワンセットにした考えはとても大切だと感じています。これを進めていく中で、先生、子どもたち、保護者も楽しさを持つことが大切で、そのためにはどうあるべきかと考えますと、やらされ感があると嫌になってし

まいますので、主体的に進められる雰囲気や仕組みを大切にしていける方がうまくいくのではないかといつも思っております。そこで私は、最初の校長会では、主体性、主体的とはどういうことか、ということをしっかり考えてほしいという話をさせていただきました。こちらもう一度捉え直して進めるべきであると強く思っています。

授業改革にはいろいろな手立てがありますが、それを、先生方がやらされ感なく自分たちから取り組んでいくというやり方、働き方改革でも、校務支援ソフト等のお膳立てをただ待っている状態ではいけないので、校長や教頭が中心となって試しながら進めていくことが必要だと思っております。

ただ、特に学校の働き方改革は、昔からずっと言われていますが進んでいない状態です。どんな仕事であれ大変なことはたくさんあるから学校だけを特別扱いできないという状態が続く、「話題になっているけど問題になっていない」状態が続いたことで取り返しのつかないところまで来ております。学校の立場としたら特に現場で子どもと向かい合っている先生方は子どもたちにかかる時間を減らすということを保護者には言いにくいのです。そこは校長が矢面に立つ必要があるのですが、学校の立場では訴えにくいところが現状だと思います。そこは教育委員会が全体に向かって業務改革に協力してほしいということを何度も発信していくことが必要かと思っております。ICTの導入も先生によって得手不得手の方がいらっしゃって、苦手な方は周りが変わっていく中で自分も変わらざるを得ないという中で進んでいると思います。ただ、理解が進み使えるようになってくると、主体性が芽生えてきます。主体性をキーワードに進めて行くことで、皆が楽しく取り組めるのではと考えております。

【狩野委員】 「学ぶ楽しさ日本一」は今年度が最終年度になります。やはりそこには「どのような成果が出たか」「どれだけ現場で受け入れられたか」「どれだけ子どもたちの学ぶ意欲が高まったのか」など、検証が必要だと思います。検証した上で新たなスタートを切ってほしいと思います。

「学ぶ楽しさ日本一」の「日本一」という言葉について、個人的に気になっておりました。私自身「日本一」をめざしなさいと言われると「そんなん無理やん。」と疲れてしまうタイプです。「日本一」をめざすことはいいことだと思いますが、それが全面に出すぎると、まじめな学校や先生が疲れてしまわないかなと心配をしています。今年度の取組では「授業改革」「校務改革」「教育施設環境」に絞っているところに好感を持っております。「こういう改革をすればこういう学校になりますよ」「授業のここをこういう風に改善すれば子どもたちの目が輝きますよ」という具体的な指導助言を教育委員会から働きかけると先が見えてくるので、目標に向かって現場は頑張ってくれるのではないかと思います。先生方がのびのび働ける学校づくり、職場づくりを大切にしていきたいと思います。

個人的な意見を含みますが、最近小学生、中学生と話をする機会がありました。そ

の時に感じたのは、内向きの子が増えてきているのではないかということです。原因は特定できませんが、少子化かもしれないし、業務改革の名のもとに学校行事が減って子どもが活躍する場が減少している状態なのかもしれないし、スマホやゲームによるコミュニケーション不足なのかもしれませんが、日本全体が内向きになっているからだろうかといういろいろ考えます。ただ義務教育の間は、友だち同士でワイワイやって、大きな夢を持って、チャレンジして失敗してという経験が人生の基礎をつくるのではないかと思います。そしてその基礎づくりをサポートする役目を担っているのが大人である私たちであるという意識をしっかりと持ち、教育委員会にも引き続き取り組んでいきたいと思っています。

【近藤委員】 時に学校への思いを考えることがあります。私は退職して8年になりますが、退職後しばらくして講師登録しませんか、というお誘いを受ける機会が何度かありましたが、その都度やんわりとお断りさせていただきました。近年のICTの波にはついていけないという思いもあつてのことでした。数年前にとある学校の部活動指導員をさせていただきました。短期間ではありましたが、とても素晴らしい楽しい時間を子どもたちと過ごさせていただきました。教える方も楽しい、受け入れてくれた子どもたちも楽しいと、そういう思いに溢れていたと思います。いい汗を流し本当にいい時間をいただき、学校教育の一つの原点のようなものを再確認させていただいたひとときでした。学校現場がブラック企業であるといった報道がなされがちではありますが、大変だけれどもやりがいのある職場であり続けてほしいと常々思っております。

授業改革、校務改革には3つほど感じるがあります。1つ目は、学校訪問で、この学校は頼もしいなと感じることがあります。それは市長もおっしゃったように阿万小学校の例でもあるのですが、学校全体でテーマを決めてその方向に向かっている学校では、子どもたちの目も概ね輝いているように感じます。このようないい取組を学校間で情報交換していただいてよい意味で切磋琢磨できるようになればいいと思っています。それには様々な取組があると思いますが、最終的にはOJP（On the job training）によって日々の授業の中で先生方が理解しているということが大事だと思います。

2つ目に「学校の発信力が弱い」という課題について、学校では当然校長が発信していく必要がありますが、もっと児童生徒の声を上手に発信すればと思うことがあります。毎年、全国学力学習状況調査が行われており、児童生徒への質問紙ではいろいろな項目があります。「いじめはありませんか」「道徳の授業は楽しいですか」などの質問に対し子どもの素直な気持ちが反映される質問紙であると思います。こういったものを上手に素材として活用して発信していただいて、保護者や地域の方の目がそういうものに触れる機会を増やしていただければと思います。

3つ目は小規模校についてです。学校の規模が小さくなると、職員の数も減り、教員一人当たりの校務分掌が増加するという状態があり、これは変えがたいところがあります。その反面、若いうちから様々な分掌を持ってチャレンジできる機会でもありますし、常にアンテナを張ってチャレンジしていく姿勢も大事なのではないかと思います。

【青木委員】 先月の教育委員会定例会で「南あわじ市教育長就任にあたって」と年度当初の校長会資料「年度当初にあたって」という2つの資料の中に取り組むべきことがほとんど書かれているなあとと思いながら総合教育会議の資料も読ませていただきました。「授業改革と校務改革」を1つのパッケージとして取り組むこととか、DCAPサイクルによりプランで終わって次にすぐに繋げられるようにして、年度当初に先生方が忙しくて大変だという状況を改善していくことなどか書かれておりました。

本日の資料では、「学校の発信力が弱い」と書かれていますが、市の発信力もかなり弱いのではないかと思います。教育長の就任にあたっての資料などは、市のホームページに出ていてもいいのではないかと思います。新しい教育長がどのようなことを考えられているのかということが、学校の先生一人一人にすぐ見える状態にしておく方がいいと思います。同じことが「学ぶ楽しさ日本一」にも言えると思います。ネットで「学ぶ楽しさ日本一」と検索してもすぐわかるものが出てこないのです。文章を読まなければならなかったり、読み込んで理解するのに時間がかかったりといった感じです。でも、2021年3月26日公開の市長が学ぶ楽しさ日本一について語っている動画を見つけました。とても分かりやすい内容なのです。ただもったいないことに354回しか再生されていないのです。これを市としてどう受け取るかだと思います。教育委員会でいくら言っても保護者に伝わらない中で学校から発信を！と言っても無理があると思います。動画では冒頭からとてもいいことをおっしゃっていて、学ぶ楽しさとは「好きこそものの上手なれ」ということですよ。とてもわかりやすいのです。でも、市長のおっしゃっていることが、私たちがいただいている資料の中では出てこないのです。最近いただいた資料8「学ぶ楽しさ日本一」を見るとさらにわからなくなっていました。これを見ると、やらなければならない行動指針は、読書活動とアフタースクールなんだという誤解を招きかねないと思います。発信も弱く、資料もぶれているように感じます。今年度は「学ぶ楽しさ日本一」を掲げた最後の年ではありますが、最後まで走りぬく必要はあるし、できることはきっとあると思います。

市や学校のウェブサイトを変えていただくことはすぐにできることだと思います。学校によっては、ウェブサイトを経営方針が書かれているところもあります。校務改革に取り組まれた市外の他校のウェブサイトを見ると、「こんなふうがんばるぞ。」ということが書かれており、子どもが見てもわかるような書き方もしています。そん

なことを市内の各校でチャレンジしてもらう価値はあると思います。学校経営方針を載せるだけでもいいのですが、「こういうつもりでやるから一緒にやろう。」というような声かけがあるかないかで、そしてウェブサイトに掲載することで保護者もすぐに見ることができます。「学校の発信力が弱く」と言っている場合ではないのではないかと思います。

橋本委員がおっしゃったように、「話題になっているが問題になっていない」ということですが、問題は課題なので、取り組めるところから進めてほしいと思いました。また、保護者はさまざまな意見を持っていますのですが、学校も教育委員会も保護者からすると敷居が高すぎて、意見を言うていくには正直しんどいところがあります。ですから、保護者の方から、私のところへ意見を言ってこられることがよくあります。保護者は言いやすいところを求めているし、たくさん意見を持っていらっしゃいます。話題になっていることを教育委員会がきちんとピックアップする気があるかどうかというところだと思います。この会議が始まる前の教育委員会定例会で、保護者に対するWebアンケートで、文字数制限があったために意見を全部伝えられなかったということが話題になりましたが、「たくさんご意見がある方は、このメールアドレスにご意見を送ってください。」という一文が書いてあるかどうかだと思います。保護者からの意見に一つ一つ当たるというよりは、校長や教頭から、「こういうことに取り組めます」といった発信をこちらから本気で伝えていくと何かが変わるかもしれないと思っています。

令和6年度教育方針の、基本方針1の中に『「読解力」向上、読書習慣づくり』とありますが、本を読めばいいというふうにとられないだろうか心配しています。「読解力」は「読み解く力」だと私は思っています。「読む」だけではなく、会話をしている時の人の対応の仕方や言葉じりなど、ちょっとした状況を読み解く力がコミュニケーション力につながり、コミュニケーション力が上がってくると対応力がつき、自信もつき、自己肯定感を高めることにつながっていくと思います。ですので、ここの書き方がもったいないなあと今更ですが思います。もしかしたら「読解力」ではなく「読み解く力」という言葉の方がふさわしいのかもしれないかもしれません。

「学ぶ楽しさ日本一」のラストイヤーは、学校に本気を求めるからには教育委員会も本気でかかっていくということなのではないかなと思います。そして狩野委員がおっしゃったようにその検証を図る必要があるのだと思います。

【清水委員】 前回の教育委員会定例会で、保護者として「学ぶ楽しさ日本一」が伝わっていないのではというお話をさせていただいたところ、以前から発信がうまくできていないという課題を認識しているという回答をいただきました。ですから今年度が最後の年になるということをお聞きして残念な気持ちです。でも、あと1年間の中でできることもあると思います。私もお手伝いできることがあればと思っております。

私自身の教育活動として、月1回地域の読み聞かせのボランティアに行っています。アフタースクールのまちの先生として月3回活動しています。また、福祉の授業としてパラスポーツを通して障害について知ってもらうための授業を各学校でさせていただいています。正式な学校訪問時では、先生方も緊張して迎えられているように思いますし、しっかりプランが作られた中で授業が運営されていますので、すごいなあと思う授業がされているなと感じます。私は、実際に普段の学校の状況下で子どもたちと触れ合ったときにいろんなことを思っています。市内のほとんどのアフタースクールに行かせていただいているのですが、子どもたちがいろんな人と出会っていないなと感じます。私が行っても挨拶をする子はあんまりいないのです。そこにいるアフタースクールの先生も子どもたちへの声掛けを意外にされないのです。他者が来た時に関わろうとする力や想像力が欠けていると感じています。

自分がしたり言ったりしたことに対して相手がどう思うだろうと想像することを積み重ねることで、未来の自分がどういう人間になっているかをイメージできたり、身近な先生や保護者が自分が何かをすることで感じているだろうことを読み解くことを積み重ねる中で、社会性のある大人へ成長していくことができると思っています。

ある先生が卒業式を前に在校生に対し、「在校生としての言葉を卒業生に自信を持って言える人は？」という問いかけをしたとき、子どもたちは、自信はないから手を挙げない。という感じになります。先生が投げかけた言葉に子どもたちは素直に反応するので、先生が子どもを主体的にしたいのであれば、主体的にできるような声かけのパターンがあります。それがペップトークだったりするわけですが、その声かけのパターン「技」を先生が持っていたら、毎日の問いかけが変わってくるのではないかと思いますので、そういう研修を先生方に取り入れていただきたいと思います。先ほどの先生の問いかけは「卒業生を気持ちよく送り出そうね。だから全員一言言おう。」の方がよかったのかもしれませんが。

先ほど委員さん方もおっしゃられていましたが、学校行事が減ることで子どもたちが発信する機会も減っています。どうしても卒業式や運動会と言った大きな行事の時にめちゃくちゃ頑張らなければと思ってしまいます。でも日頃から小さな行事があって経験していたらだんだん楽になって、大人になった時にいつもやっていることに少し知識やスキルを足して発言したり行動に移せることができるのではないかと思います。

資料の校務改革の中で、「地域人材の活用」があります。地域の人たちをたくさん入れることで、子どもたちとディスカッションするなどできると思います。子どもたちの中には質問をしない子もいますが、他の子が質問をすることで知れることもたくさんあります。先生じゃない大人から学べることもたくさんあると思いますので、どんどん活用していただきたいと思います。福良小学校では移住された方との関りがあった時には、子どもたち自身が福良をこうしたい。といった感想をたくさん書いていた

のです。しかし、それに対するフィードバックがないので振り返りができないということになります。子どもたちそれぞれの感想に対してみんなで話し合うことでコミュニケーション力や主体性がついていくのではないかと思います。学校でいろいろな意見が言えると、楽しくなり、もっといい学校にしようという気持ちが芽生え、学校が良くなっていくのだと思います。子どもたちが何か反応したらフィードバックすることは大切だと思います。絵本の読み聞かせについて言うと、上級生が下級生に対して読み聞かせする時、選んだ理由など子どもの思いを加えると、さらにコミュニケーションが広がるのではないかと思います。

【青木委員】 清水委員のお話を聞いていて、一つ言い忘れたことがあります。子どもたちは賢いので、ほめるだけでは足りなくて、「この先生ほめるしかせえへん」ってなってしまう。ほめるだけではなく反応することが大切だと思います。子どもたちは先生にも親にも反応してほしいと思っています。反応されるかされないかでその場でどう生きていくかが変わってきます。反応するということをしていかないと、コミュニケーション力は上がらないのではないかと思います。

【新宅教育長】 「学ぶ楽しさ日本一」という大きなテーマに向かって最終年度を迎えております。私は「学び続ける子の育成」がメインであろうと思っています。変化の激しい時代の中では生涯を通して学び続ける力が必要になってきます。社会の中で大切なのは、主体性とコミュニケーション力だと考えています。学び続ける子の基盤となるのは読解力であり、読解力は豊かな言語活動を通して育まれていきます。言語活動とは、書く、読む、話す、聞くといったものであり、それを通して読解力が育まれていきます。これらの力を子どもたちがつけていくためには授業改革が必要となってまいります。授業の中で子どもたち同士がどうつながっていくか、先生と子どもの一対一のやりとりではなくて子どもたち同士でこそ言語活動が活発になりコミュニケーション力も高まります。仲間が自分の話を聞いてくれる、仲間の話を聞いてあげられる、そういう雰囲気の中で安心して授業を進めて行ける環境が大切です。また、自分の考えを理解してもらうためには、自分で書いてまとめて話すことが効率的で、自然と力をつけることにつながります。これを年間1000コマの授業の中で、各教科や各行事の中で育んでいくことを進めていきます。また、みんなが教室の中に居場所ができて、その結果不登校や問題行動やいじめが減る、さらに結果として学力が上がる、というエビデンスがたくさん出て来ており、市内でも授業改革を進めている学校ではそういう傾向が顕著に表れてきております。このことはさらに働き方改革につながってまいります。これまで解決できなかった大きな課題が授業改革によってある程度の改善が見込まれると期待できます。そして、授業改善を進めている学校の取組は横展開して市内全域に広めるとともに、保護者や地域にも発信していくよう学校長が

進めてほしいと考えております。教育委員会は、各学校の発信を横展開していく手助けをしていく予定で、その仕組みづくりはほぼ完了しております。今年夏頃から進めてまいります。

「学ぶ楽しさ日本一」を何を持って評価するか、授業改善としての達成度を示す指標を作成いたしました。まずは「学校長」がつけたい力と学び方の説明ができ、次に「ミドルリーダー」が、その次に「教職員」が、最終的に「こども」がつけたい力と学び方の説明ができることをめざします。

先日、年度始めの校長面談がすべて終わったところですが、校長からは具体的な取組の話も出てまいりました。学習指導、学校運営、生徒指導、危機管理全てにおいて学校内で仕組みを作られるようになってきております。具体的でないものには再度検討をお願いしております。具体的なことが出てくると評価がしやすくなりますので、学校もそういう努力をしていただいております。

【守本市長】 みなさんのご意見をお聞きして、少しコメントをさせていただきます。

狩野委員のおっしゃった「学ぶ楽しさ日本一」の検証が必要というのはまさにそのとおりです。「学ぶ楽しさ日本一」という目標を掲げてこれまで仕組みづくりを進めてまいりました。それは、スクールチャレンジ事業、コアカリキュラム、アフタースクールということになると思います。率直に言えば仕組みは作ったけれど、学校の授業を変えていくという視点でそれを浸透させて来られたかということと必ずしもそうではなく、それは教育委員会だけではなく市の責任でもあります。その部分の本気度が足りなかったと感じています。

元々コアカリキュラムを作ったのはなぜかという、淡路人形浄瑠璃を活かすという意味と、本心を言えば教員も生徒と一緒に学べる仕組みを作ることで普通の教科にも及ぼそうというものだったのです。コアカリキュラムのやり方を全教科に広げようと。今は「ふるさとを創造する児童生徒育成プロジェクト」と呼んでいるコアカリキュラムですが、なぜコアカリキュラムと呼んでいたかということ、教育の指導の根幹となるもの、核になるもの、それを全教科に広げるということだったのですが、その精神をきちんと伝えられていなかったと思っております。

スクールチャレンジ事業をスタートした時には、学校自身が新しい学習指導要領の考え方に沿って学校を変えていくために何をすべきかだったのですが、実際の内容は、本筋の方よりは、周辺の方に寄ってしまったように感じています。ですので、これから軌道修正していかなければならないと思っております。「学ぶ楽しさ日本一」は、今年度が最終年度ということですが、改めて目標を設定した結果、引き続き取り組むという場合もあると考えております。私の希望としましては「楽しさ」を追求していかなければならないと考えておりますので、徹底的に学校教育で追及してほしいと思います。

「学び続ける力」とは「学ぶことを楽しいと感じる力」ですので、この部分がうまく

先生にも子どもたちにも保護者にも伝わるように徹底していかなければならないと考えています。

読解力とコミュニケーションについて、委員の皆さまからいろいろご意見いただきましたが、私なりの考え方を述べさせていただきたいと思います。「読解力」というと硬いイメージがあって、「難しい文章を理解する力」という風に感じてしまうのかもしれないのですが、日本の数学者である新井紀子さん著の「教科書が読めない子どもたち」という本があります。コミュニケーションの一番の根幹とは、自分の心の中のイメージをどう言葉にするか、他の人が言っていることを誤解せずに理解できるか、ということ、新井さんが本の中で伝えています。新井さんが作成した試験がありまして、市役所職員も受けたのですが、微妙に違う言い回しを使った文章が同じことを意味するかどうか、逆にほぼ同じ言い方をしているが全く違う意味であることもありますので、そういうことをテストで試そうとするものでした。そういうところがコミュニケーションの基本だと思うのです。人間が伝える手段は言葉だけでなくボディランゲージもありますが、現代の子どもたちは圧倒的にボキャブラリーが足りないので、文章にもっと触れさせるために、読書を推進しようということになってきます。ただ読書したらそれでいいのかという話ではないですが、コミュニケーション力をつけるためには幼少期から本に触れる習慣をつけるのが一番だということに、目標があつてのステップということになります。「読解力」、「読み解く力」他にもいい表現があるかもしれませんが、これは国語の成績を上げるという趣旨ではないということです。

橋本委員のご意見の中で、働き方改革にしても他のことにしても、主体性がないところに課題を感じていらっしゃるというお話がありました。私もそう思いますが、私の経験から言えば、人間はある程度強制されないと動かないという部分がありますし、やらされているうちにおもしろくなるという面もあると思いますので、スタートの時点では少し無理をかけるのも仕方のないのではと思っています。ただ、ずっと強制し続けるはよくないことだと思っています。うまく始動させてあげて、前のめりになっていくというやり方がいいのではないかなと思っています。

狩野委員がおっしゃられた、友達同士ワイワイすることや行事の減少により子どもの活躍する機会が減ったというところは全く同意するところではあります。ただ、普段の授業でも子どもたちが活躍する場を作ることが大事だと思っています。子どもが主体的に進める阿万小学校のような授業が広がればよいのではないかと思います。

以上、ご意見をお聞きした私の印象を述べさせていただきました。

「学ぶ楽しさ日本一」の実現をめざして

◇教育施設環境の観点から

【守本市長】　続きまして、教育施設環境の観点から、事務局より説明をお願いします。

【田村教育総務課長】　それでは私の方から、学ぶ楽しさを支える「学びの場」である教育施設環境、特に小中学校の今後のあり方についてご説明を申し上げます。

資料につきましては先ほどの学校教育課の説明資料の続き、「2. 教育施設環境」と書かれたものをご覧願います。

先ほど市長の冒頭ご挨拶にもありましたように、少子化に伴い児童生徒数は年々減少傾向にあります。詳しくは別添の「資料2」をご覧くださいと思いますが、少しだけ数字を申し上げますと、組合立を含めた市内すべての小中学校の児童生徒数は、平成30年度には3,628人であったものが、本年度は3,322人で8.4%の減少、今後の推移をみると、令和12年度には2,549人、対令和6年度比で23.3%減、対平成30年度比では29.8%減となる見込みです。特に小学校においては複式学級化や学校統合などの対応が待ったなしの状況となっています。加えて市内小中学校いずれの施設においても老朽化が進み、学校規模の適正化についての検討と、各施設の老朽化対策はセットで考えていく必要があると考えます。

こうした状況は決して南あわじ市だけの問題ではなく、国全体の問題として、文部科学省も「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引き」を発出し、その中で「機械的に統合の適否を判断するのではなく、地域が抱えるさまざまな実情や課題に応じ、主体的に検討がなされることを望む、と触れられているところです。詳しくは資料3をご覧ください。

こうした状況を踏まえ、今後考えていくべき方向性の案としては、地域ごとの実情や課題を的確に捉えた検討が必要であることから、市内一律的に基準を設けるのではなく、個別の事情に応じて対応してはどうかと考えます。そうすると、特に児童生徒数が少なく、複式学級を考えなければならないような小規模校から検討に入ることが望ましいのではないかと思います。検討にあたっては、小規模校を維持するのか、または統合するのか、または違う可能性があるのかといったことについて、あらゆる可能性を排除するのではなく、例えば学校施設だけで考えずに児童福祉施設や社会教育施設をはじめとした各種施設との複合化もひとつの考えだと思えます。

また、ICTを活用するなどの方法で、よりよい学習環境を整えたり少人数での学級を維持するために体制を強化するといったことも当然予算を伴う話ではありますが、単に瞬間的なイニシャルコストに固執することなく結果として最少の経費で最大の効果をあげられる取り組みの検討も必要ではないかと考えます。

加えて学校が地域のシンボリックな施設であり、地域の核としてあり続けるために先に述べたような複合化だけでなく、地域の人口減少対策も踏まえた総合的な議論が必要になると思われますが、こうした取り組みを進めるにあたっては、教育委員会だけではなく関係部局と協力し合い、「児童生徒や保護者、教職員にとって、また地域住

民にとって何がベストチョイスか」といったことを丁寧に検討していく必要があると思います。

そこで本日はこうした進め方についてのご意見を賜りたいことに加え、まず現状を踏まえた中で「あらゆる手段を幅広く検討しながら現在の学校を維持する」のか、「スケールメリットを最大限に生かすため、必要に応じて統合を進める」なのか、また一律に基準を定めるべきか、個別事情にきめ細かく対応すべきか、といったことについても委員各位の忌憚のないご意見を賜りたいと存じます。

参考に、資料4では学校の小規模化、大規模化それぞれのメリット・デメリットが示されています。内容としては、小規模校はきめ細かな対応ができる反面、人間関係の固定化が起りやすいことやバランスのとれた教職員の配置が困難であるといったこと、大規模になると豊かな人間関係の構築が図られやすい反面、児童生徒一人ひとりの細かい把握が難しくなりやすいといったことがあげられています。

ただ、資料は平成20年に示されたものであり、ICT化や部活動の地域移行など近年の動きによって一部デメリットが解消されたり、解消される可能性が高いものも含まれているのであくまで参考としてご覧いただきたいと思います。

また、資料5及び資料6では、いわゆる施設の複合化利用の先進事例を掲載しています。具体的に資料5では学校と他の施設の複合化、資料6では学校以外も含めた複合化となっておりますが、学校の事例が多く掲載されています。参考になれば幸いです。

説明は以上となります。

【守本市長】 以上で、説明が終わりました。

各委員から、お考えやご意見等をおうかがいたします。

【清水委員】 大規模、小規模校のメリット・デメリットが書かれている資料を見ると、確かに、人数が少ないと小さいコミュニティで仲良くできる反面、何か事象が起こった時に逃げ場がないという問題もあります。一方で、小規模校の統合は通学の問題もあります。バス通学という手段もありますが、体力維持という面では難しいところかなとも思います。人数が少ないと集団活動のグループ分けや団体競技を行う面での困難さもあると思います。まず始めるとすれば、自分の学校とは違うところでも子どもたちは活動しているよ、ということを意識できる学校間の交流などの取組があればいいかなと思います。

資料の事例にもあります複合施設のメリットでいうと、保育所や高齢者のデイサービスが一つの建物に入ること、異年齢の交流が実現できたりして、地域の人たちと触れあう機会が持てることになります。空き教室などを活用して、異年齢同士で挨拶や、相手を思いやる力が育まれ、人間力が上がるのではないかなと思っております。

地域に残しつつ、いろいろなコミュニティが入ってくる学校施設となれば、子ども

たちに求められているコミュニケーション力が伸びてくるのではないかと感じています。

【青木委員】 資料3の「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引」には様々なパターンが細かく書かれていて、スクールバスの利用で運動不足にならないよう、学校の手前で降ろして一定距離を歩かせるとか、バスの中で音声教材を流すなど、たくさん手段が紹介されています。

私は、統合はやむを得ないと思っています。先日、辰美小学校の運動会に行かせていただきました。どんどん規模が小さくなっているのをここ数年で感じています。現在の児童数は100人ちょっとですが、規模数としては子どもたちもコミュニケーションしやすいですし、先生とも話がしやすいのですが、縦割り班となってくると、6年生数人で下の子たちお世話となると少ししんどいかもしれない、というお話を雑談の中で校長先生とさせていただきました。ICTを活用したとしても、やはり統合はやむなしなのかなと感じました。

既に私たちはたくさんの施設や空間を持っているので、何を持っていて何が足りないか、何のために欲しているのかをよく考えないといけないと思いました。施設の複合化や集約化の資料を見ていると民間の力を活用している施設もあります。民間が設計や建設から関わって運営も行うことでランニングコストのことも考えられるという視点です。市内では、今後様々な施設の修繕も考えていかねばなりません。今ある建物をみんなでどのように使うかを話し合えれば何とかなることもたくさんあるように感じています。ですので、市民との会議も進めていくといいのではと思いました。1点気になったのは、学校と地域の施設を複合化した場合の教員の負担のことです。地域との折衝や他校との調整などを先生方が担うのかと思うと、先生のなり手がさらに減るのではないかと心配します。本日は市長部局の他課の上の役職の方も出席してくださっていますので、皆さんと一緒に、南あわじ市を残すのだ、消滅しないぞというつもりで進めていくということが、教育施設環境の改革につながっていくのではないかと感じています。

【近藤委員】 3点述べさせていただきます。1点目は、昨年度より、南あわじ市でプールの授業について民間事業者を活用して進められているのはいい方法だと思います。子ども、教職員、保護者の声を聞かせていただきながら他でも創意工夫して進めて行けたらいいのではと思いました。

2点目は、先進地視察についてです。私が現役の教員であった時、夏休み期間中に教育委員の皆さまと学校管理職と一緒に先進的な取組について視察していた時期がありました。一例をあげると、当時、小学校での英語の学習をスムーズに導入しなければならぬという課題がありまして、愛知県岡崎市にある小学校を視察させていただ

きました。新しい取組を見させていただき大変参考になり良い経験をさせていただきました。

今後、学校のあり方に向けて、素案作りの段階から、様々な関係者と一緒に先進地を視察したり、様々な関係者や団体が素案作りから参画できるようになればいいかなと思っております。実際の現場を見に行くことで、例えば教育委員や校長が自分ごととして取組む意欲につながることで先進地視察は非常に有意義であると考えております。

3点目です。先日SNSを見ておりましたら、市長がウクレレを弾いている動画に出会いました。毎年、市長は「20歳のつどい」で「ふるさと」の歌を披露されています。「志を果たしに・・・」ということは、私もおっしゃるとおりだと思います。

学校施設を考えますと、10年先なのか20年先なのかわかりませんが、統合は避けられないと思っております。しかし統合しますと、教員の定数が減ってきます。私の教え子にも優秀な教員が島外で活躍しています。そういう優秀な人材がふるさと淡路島で志を果たしに帰ってくる機会が奪われないようななんとかならないかなという気持ちでおります。文科省の資料の中では、学校統合か、小規模校によるメリットの最大化かデメリットの克服という2点があげられているのですが、統合してもクラス替えができるのが一番の理想だと思います。1クラスの学級規模は日本では長らく40人となっており一部35人にもなってきました。しかし欧米では数十年前から20人学級となっています。こういったことを踏まえると、1クラス20人という選択肢が可能であれば、統合してもクラス替えができて先生の定数も大幅に変わらない、という状況が実現でき、「志を果たしに」優秀な教員を淡路島にお迎えできるのではないかと考えております。

【狩野委員】 1点目です。各教室に空調設備が整備され環境が良くなればよくなるほど、子どもたちは外で遊ばなくなってしまうかなと心配しています。外で子どもたちが思いっきり遊んでいる学校が健全な学校ではないかなと思います。教室に引きこもっている子を見守る体制作りも必要かと思っています。

2点目です。学童保育のことですが、広田の学童保育は70人の希望者がいると聞きました。広田の学童保育を実施している広田小学校の空き教室の広さでは70人は受入れしにくいのではないかとお聞きしたところ、他の教室やランチルームを活用するなど、教育委員会の方で対応を考えていますということでした。他の学童保育でも同様だと思いますが、活動の場を整えていただきたいと思います。

3点目です。広田小学校のエアコンを音楽室に設置してくれるということですので、今年の夏休みは、子どもたちは涼しい場所で吹奏楽の練習ができてよかったと思っていたのですが、今年度、広田小学校が淡路吹奏楽連盟を脱退したということでした。連盟に加入していると休日の出役があったりするそうです。今後は伝統の吹奏楽部を

地域移行していくということでした。地域移行したら実際にどうなるのかというと、公民館を利用して活動するとか、月に何度か地域の指導者や保護者を集めて練習するとかという話でした。しかしそんなに単純なことではなく、楽器の管理や他の課題もありますので、すべての準備がしっかり整ってからでないといけないのではないか、という意見がちらほら入ってきています。学校施設の環境づくりを進める中で環境に付随する様々な課題があるのだということの認識が必要ではないかと思います。

【橋本委員】 洲本市も学校の再編を進めているところですので、明確な意見を言いにくいのですが、感じていることなどを述べさせていただきます。小規模校にも大規模校にもメリット・デメリットがあるということは十分承知しています。市民に対してアンケートをお願いする中で、相反する意見がたくさんあるのですが、それはどちらも間違っていないということが特徴であり、難しいところであろうと思います。小規模校だからダメということではなくて、小規模校ならではの特性を活かしてそれぞれががんばっています。ただ、もう少し人数が多ければできることがもっと増えるのに、という可能性が一つあります。少なかったら少ないなりにできることがあります。小規模校の先生は人数が少ないからやりやすいのではなく、人数が少ないからこそ指導力が必要になってくる部分もあります。小規模校では先生の人数も少なくなりますので、一人当たりの校務分掌も増えます。出張も増えてきます。特に臨時的任用の先生がいらっしゃると、正規の先生でないといけない部分の負担も増えます。また教科の先生では他に同じ教科を教える先生が少ない、いないという状況になると特に初任の先生は大変苦勞されているのではないかと思います。学級経営、生徒指導、保護者対応にも先輩教員がいないことで同じように大変な思いをしており、働き方改革から言うと大変負担になっているという原因のひとつでもあります。クラスが複数あると、若干その辺りが緩和される可能性があると感じます。ただ、1クラスの人数となると、最低1クラス20人ほどの指導というところがいいのではないかと思います。複数のクラスがあると、子どもたちの間でトラブルがあった場合は、クラスを別にすることができます。しかしそういう子が増えてくるとだんだん2クラスではその対応も難しくなってきます。逃げ場を作ってあげないといけないのですが、2クラスで完全に解消されるかということと必ずしもそうではないのです。

ネットでの意見などを見ますと、学校教員をもっと増やしたらいいのになぜ増やさないんだという意見があったりします。教員については、定数が決まっているため、自由に増やしたりできないのですが、ご存じない方からすればもどかしさを感じているのではないかと思います。これらのことを踏まえて対応することがなかなか難しいところではあります。どのように発信していけばいいのか悩むところでもあり、時間がかかるのはこのようなことも原因の一つではないかと考えます。

【山本委員】 資料で児童生徒の人数を見せてもらおうと、人数の多い学校と少ない学校とありますが、将来的にも少ないところは、統合した方がいいのではないかと思いますし、それなりの人数がある学校はそのまま残すことで保護者の負担もかからないのではないかと思います。いずれにしても今から準備を進めていくことが大事ではないかと思います。学校施設について、これまで前職でも学校の工事に入らせてもらっていましたが、私の知る限り、三原中学校、北阿万小学校、辰美小学校のあたりが市内でも新しい学校ではないかと思いますが、それでも20年以上は経っていると思います。平成16年あたりから学校の耐震補強がそれぞれ始まってきたと思うのですが、その後空調の改修工事も行っていると思います。今後、学校を統合する際、どの校舎を使うか、という話になった時、おそらくどの校舎も古くなっていると思いますので、統合の問題と同時に施設の問題も考えていかなければならないと思います。

高校を卒業して島外に出ていった人は大変多いと思うのですが、一旦出て行った人が、将来結婚して家庭を築いた時、南あわじ市がどんな街であれば、帰って来て住みたいと思うのか、というようなことを「20歳のつどい」の時にアンケートを取ってみるのもいいのではないかと思います。そして理想の南あわじ市に近づけていくということも必要でないかと思います。どんどん少子化は進むと思いますが、環境のいい施設を考えていくことが大事ではないかと思います。

【新宅教育長】 全国でも本市と同じような課題を抱えているところがたくさんあります。全国都市教育長協議会に出席した際、他市の教育長と話をする機会がありました。やはり統合が避けられないにしても、どこまでの範囲で統合するかという問題があります。一つは登下校の問題です。広い校区となった時に登下校をどうするか悩んでいる市が多くありました。文科省の言う適正規模はもちろんあるわけですが、各市によって状況は様々で、どのあたりが適正規模かというところが大変難しいところでもあります。ここ数年、全国の学校の授業を見せていただく機会があり、本市の20年後の学校規模となるような学校も視察してきました。複式学級もある中で、新学習指導要領に沿った授業が思うようにできない状況下で、隣の市町の小学校とオンラインによる授業をしておりました。授業の方法や進め方も双方の先生方で調整し、年に数回は一か所に集まって合同授業を実施しています。合同授業であるということを知らなければ、普段は別の学校で授業を受けている子ども同士であるということに全く気付かないくらいでした。少子化の中でいろいろ工夫しながら授業を展開している状況でした。

本市でも遠い先の話ではなく、複式学級が迫ってきている学校もあり、喫緊の課題だと思っています。

複合施設を使つての学校運営の事例としては、学校の空き教室に福祉施設を入れ地域のお年寄りが集う場所をつくり、地域やお年寄りの力を借りて学校教育を進めてい

るところもあります。様々な取組がありますが、それにはコーディネーターの役割を担う人が必要だと感じております。

適正規模としての1クラスの人数ですが、文科省の基準では2クラス以上ということになっています。私の経験からすると1クラス20人ほどで様々な活動も工夫もできるだろうと感じています。現在の市内の学校は1クラス20人ほどの学校が多くなっています。ある意味本来の適正規模になっているのではないかと感じます。1クラス35人くらいになってくると、担任の負担も大きくなってきます。やはり1クラス20人ほどがいいのではないかと思います。様々なメリット・デメリットが混在する中で、本市及び本組合の子どもたちにとって、一番いい環境で学ぶとは何かということを他方面の意見、また専門家の意見を聞きながら検討してまいりたいと思います。

【守本市長】 市長会ですごく違和感があるのは、大部分の市長は35人学級になるまで統合する、といったオートマチックな考え方をされていることです。コストだけで考えるといいのかもしれませんが、これまでの学習の考え方が変わってきており、「個別最適な学び」を提唱している中で、35人学級が適正なのかという疑問もあります。そういう面では20人学級がちょうどいいのではないかなと思ったりもします。そのためには市も人件費等の負担をせざるを得ないところではありますので、よく考えて進めさせていただきたいと思います。

一方で、運動会が寂しくなったという感じは確かにしますが、何校か集まって実施したらいいのではないかなとも思いますし、例えば体育の授業を何曜日と決めて、数校が集まって一緒に授業することで人間関係のマネージの仕方を学ぶ機会になるようにも思います。様々な面から考えていく必要があると思いますが、私自身は市内で中学校を1つ、小学校を4つくらいにしようという発想は持っていません。どうしていくのがいいのか、ということのをこれからも考えていきたいと思います。今後も継続の課題として検討していきたいと思います。

【清水委員】 以前、橋下徹さんが来られて島内3市長も出席されていた会に私も参加したことがあるのですが、その時に守本市長のおっしゃっていたことが印象に残っています。スポーツなどに特化した高校をつくってはどうかというお話で、私は保護者としてとても魅力を感じました。少子化で淡路島でもこれ以上子どもの数が増えないという中で、何かに特化した学校を作っていないと、他からも魅力を感じられないし、ここで子育てをしたいという気持ちが生まれないと思います。公立小学校で特化した学校づくりは難しいですが、中学校や高校で専科を設けることで、やらされる勉強より、やりたいことが勉強できることになります。例えば、サービス業、観光業を勉強する学校がありますよ、と魅力を感じる子にとっては遠くでも通うことに苦じゃ

なくなるということもあるのではないかと思います。そういう学校の在り方も選択肢として考えてはいいのではないかと思います。

4 その他

【守本市長】 少しお時間をいただきまして、お話をさせていただきます。

先ほど、清水委員からご発言のあったことと関連するのですが、兵庫県では高校の統合の話が2年前に出たことから、「地方部における高校教育を考える首長の会」が発足しました。高校統合をするにしても、せめて1市町に1校は残すために県へ働き掛けていくといった趣旨でしたが、現在は既にそういう方向性は出ています。今後県の高校の再配置計画に従って進んでいますが、さらに少子化が進む中、高校をどうしていくのかということ、首長の会でも議論しております。そこで、皆さんには高校についてのご意見をいただきたいと思っております。この首長の会は、当初、加西市長が世話人をされており、現在は私が引き継いでおります。首長の会を再開するに当たり、加盟市長にアンケートを送付しようと考えております。今後様々な議論を検討する中で、高校教育に関して何を話題にしましょう、というところを尋ねたいと思っております。そのアンケート結果を踏まえてある程度のアジェンダを作って県知事や県教育長へお話をしようと思っております。私を取り上げようと思うのは、先ほどもお話がありましたが、もっと高校ごとに特色を持たせる気であれば今の県のシステムでは難しいでしょう、というお話をしようと思っております。例えば高校の部活ですが、現在では、高校が子どもたちを直接集めることが制度上できなくなっています。4年ほど前、甲子園に出ている淡路島出身の高校球児たちが主に県外のそれぞれの高校で6人ほど活躍していました。この子たちが淡路島の高校にいたら淡路島の高校から甲子園に出られたなあということもあり、これがある意味きっかけになり、高校ごとに重点部活などを決めてそういうことができるようにしてくださいという話をさせていただいたことがあります。しかしその時は、淡路島内の高校の校長先生に大反対されたということがありました。今年度は島内全高校で定員割れしております。何か特色を持たせないと高校は残れないという状態です。このようなことを問題提起しようとしているのですが、このことについて、教育委員の皆さんからも簡単にご意見いただければと思います。

【山本委員】 県立社高校はスポーツに特化した高校かなと思います。中学校で何かに特化したということは難しいかもしれませんが、高校でのそういう特化した形づくりというのはとてもいいと思います。そのためには、スクールバスなどの交通環境の整備などが必要になって来るとも思います。ぜひ進めていただきたいと思います。

【橋本委員】 島内中学生の数によって、希望調査を経て公立高校の定員が決まってくるのですが、実際には不登校で学校へ行っていなかった子などは島内の高校を受験せず、私立の通信制高校に進学するケースが多くなっています。今年度はそのケースが非常に多かったために、公立高校の定員割れにつながっているところもあります。県教委がその辺りをどのように考えようかと悩んでいるのではないかと想像しております。私の希望としては各市に公立高校があってほしいという思いはあります。しかし統合によって中学校数が減ってくると高校の規模が中学校より小さくなってくる可能性も考えられます。高校の場合、教員が専門的になっていますので、クラス数が減ってくると専門の先生が掛け持ちになってきます。そうすると学校の運営がしづらくなってくるため、ある程度のクラス数がないと高校は維持できないという、外からはわからないいろいろな事情があるのだと思います。特色となるとスポーツをイメージしますが、社会体育の話を聞いていると、中学生の内から既に島外の高校の進学を見越して社会体育に参加しているということがありますので、そのような生徒たちにどのようにして島内に残ってもらうか考えると、スポーツだけでは現状難しいのではないかと感じています。ただ、淡路島ではそのような状態になっているのは野球とサッカーだと聞いているので他のスポーツで勝負していく方がいいのではないかと思います。ただ、高校としてはクラスをある程度確保しなければならないため、例えば5人だけでもいいから来てくれたら、ということができず工夫が必要な部分だと思います。スポーツ寄りに考えていくと何かとハードルが高い面がありますが、いろいろな意見を出すうちにいいアイデアが出てきてくれたらと期待をしております。

【狩野委員】 先週土曜日、大阪桐蔭高等学校の吹奏楽の演奏会を聴いてきました。部員160人のうち3分の1が大阪府外の生徒とのことでした。魅力があれば遠くからでも通ってくれるというのは本当にその通りだと思います。魅力、特色、特化した高校をこれから検討していくのはいいことだと思います。

【近藤委員】 市内中学校卒業生の進学先の資料を見えますと、卒業生397人のうち島外への進学が57人、そのうち県外が32人ということで、それだけ広域化しております。島外への進学者が島内の高校へとどまってくれるようないい取組が実ることを期待しております。

【青木委員】 テニスでもバレーボールでも中学校である程度の成績を残している子は島外の学校へ進学しています。島内の高校に残ろうという子は中学校の最初の段階でいないです。通信制ではN高校でなんと2万人が在籍しているそうです。また神山まると高専がとても有名で、高校の内容を聞いていると楽しそうだし、お客さんもた

くさん来るし、コミュニケーションをとって自分たちでいろんなことをやっているという、魅力のある高校だと全国から集まってくるのだなと思いました。淡路高校へも土木やパティシエの分野をめざして受験する子は結構います。F C 今治高校里山校では、岡田監督がサッカーと自然に特化し、最低カリキュラムしか学業をしないと内容で話題になっています。また、ボイシーでラジオを聞いていたところ、広島県教育長をされていた平川理恵さんがおっしゃっていましたが、高校の内申書から所見欄と出席日数欄を削除することで、生徒が忌憚なく先生に意見を言えるようになり、出席日数が足りないからといってびくびくしながら受験をしなくて済むという効果があるということでした。学校としてできることはまだまだあるとおっしゃっていました。

【清水委員】 私は実際に、F C 今治高校里山校について岡田監督の講演を聞いたのですが、ここでは地域の人たちもかなり一緒に入って学校づくりに取り組んでいるようです。何かに特化する時は地域の力も必要ではないかと思います。淡路島でも専科の高校ができれば、島外から淡路島の高校にも来てくれて地域の活性化にもつながると思うので、淡路にいてもらうだけではなく外からも呼び込める高校づくりが必要ではないかと思いました。

【新宅教育長】 島外、県外に出ていく子どもたちもあり、南あわじ市では四国へ出ていく子どもたちも多いところです。橋本委員のお話にもありましたが、淡路島の子どもたちの数からすれば島内の高校の定員が割れるはずがないのだけれど、実際に定員割れをしていると。中学3年生になってくると、子どもたちもかなり自分の意思を持って高校を選んでいると思います。そういう面では特色ある教育があるということは選ばれる大きな条件であろうと思います。ぜひ、子どもたちから選ばれるような高校になってほしいと思いますので、首長の会への働きかけをお願いしたいと思います。

【守本市長】 ありがとうございます。いただいたご意見を参考にして、首長の会でも議論していきたいと思います。

5 閉 会

【守本市長】 本日は、幅広くご意見をいただきありがとうございました。ご意見を参考にさせていただき今後進めてまいりたいと思います。

これをもちまして、令和6年度第1回総合教育会議を閉会いたします。

午後0時24分